

3 長野県国語国文学会講演会（松本大学共催）

（1） 長野県国語国文学会講演会

国語国文学会40周年記念「善光寺信仰と文学」

【日時・場所】平成21年6月20日（土） 13:30～ 松本大学 126講義室

【講師】明治大学教授 林 雅彦 氏

中西満義副会長（上田女子短期大学）／ これより、御講演を賜ります講師の林雅彦先生の御紹介を申し上げます。林先生は、1944年東京都にお生まれになりまして、山梨大学を御卒業ののち、東京大学大学院人文科学研究科にお進みになりまして、大学院博士課程後期に学ばれました。先生の御専門は、非常に幅広く、また深く、絵解きに関する研究を主軸といたしまして、日本の中世説話文学、仏教文学、そして、その絵解き、説話、仏教文学の絵画に関する御研究と、また、その対象は日本に止まらず東アジアにまで及んでおります。絵解き研究におかれましては、絶えず第一人者として先端を突き進んでおられます。その絵解き研究によりまして、第6回の日本古典文学会賞を授賞されまして、「日本の絵解き～資料と研究～」それから「絵解きの東漸」という御著書によりまして、その成果が示されております。また、林先生は絵解きの御研究はもちろん、絵解き文化の保存、継承といった側面にも御尽力され、本日、わざわざお越しいただいておりますけれども、長野市にあります、かるかや山西光寺さんの荳蔻道心石童丸のお絵解きをはじめとしまして、各地の絵解き文化を守るために奮迅の働きをされていらっしゃいます。長野との関わりにおきましては、2000年4月になりますけれども、「絵解きフェスティバル in 長野」という、絵解きに関する文化が一同に介したフェスティバルも先生が中心となってお進めになりました。

林先生は、現在、明治大学教授として様々な要職にいらっしゃいますが、その他にも、絵解き研究会の代表を研究会の創設以来お努めになられ、また、近年では、国際熊野学会の代表委員をお努めになられるなど非常に御多忙を極めていらっしゃいます。そういう先生に、本日、当会の40回目の大会の記念講演をお願いできますことは、私どもにとりまして、この上ない幸せと思っております。今回、御講演をいただきます、その内容ですが、ちょうど三週間前に幕を閉じました善光寺に関わる信仰と文学をテーマとしていただきました。今年、御開帳年ということで、長野市にあります善光寺を初めとしまして、元善光寺、そして、甲府善光寺等々、六善光寺揃って御開帳の年を迎えたわけでございます。善光寺信仰に関する関心も、まだ、さめやらないという中でございまして、林先生の本日の御講演を楽しみに拝聴したいと思います。簡単ではございますが、林先生の御紹介にかえさせていただきます。それでは先生、どうぞよろしくお願いします。

林教授／皆さま、こんにちは。よろしくお願いします。今、中西先生の方から過分なお言葉を賜って赤面のいたりでございます。そんな、たいしたことを今まで研究してきたわけではなくて、いい加減なことばかりやってお恥ずかしい次第です。

「最初に、ちょっと宣伝をさせていただきますと、今日、この会場にお見えになっていただきますけれども、長野市の駅の近くに、かるかや山西光寺というお寺さんがありまして、今、中西先生のお話の中に出てきましたけれども、7月30日に「かるかや縁日芸能鑑賞の夕べ」という催しが29回目を迎えます。女流義太夫の一括人間文化財の指定を受けていらっしゃいます竹本土佐恵さんという方がお見えになって、熊野と関わりのある京都の「三十三間堂の棟の由来」というお話を演じてくだ

さるということで、ぜひ、御参席いただければと思っております。」

最近、熊野に行くことが大変多くございまして、つい先週も行ってきました。先週が68回目の熊野詣でした。実は、7月1日に世界遺産登録5周年記念の口承文芸を中心に実演と座談会、基調講演というような催しを行うことになっておりまして、そのあと9月の初めにも行きますので、70回になんなんとしていますけれども、でも、実は長野へ伺うのも、今までの回数を足しますと、おそらく50回ではきかないだろうと思うのです。そのようなことで、ただ、あちこち歩き回っているだけなのですが。

それから、今回、たまたま、いただいたポスターですが、もし、よろしかったら、あとで触っていただきますと、回向柱の箇所にてこぼががついています。今の技術は大変すごいと思うのです。この御開帳の期間中に、六善光寺を回ってきました。祖父江善光寺という愛知県の、岐阜県に近いほうなのですが、そこでお中日の法要に、ぜひ来いということで伺って、そのついでに関の善光寺へ行って参りました。相当離れていて、高速道路で1時間、降りましてからまた30分くらい。さらに関善光寺から岐阜の善光寺までが車で40分くらい。1日で3善光寺、愛知と岐阜を回ったのですが、そのときに、「笈摺」、ちゃんちゃんこみたいな白衣を祖父江善光寺さんでいただいて、御朱印をそこに押すというので、6つの善光寺を全部回りまして、少しは御利益があったのではないかという気がするのですが、この直前にちょっと病気をしましたものですから、六善光寺を回ろうと決意をいたしました。回って参りましたけれども、たいしたことはやっておりません。

今日は、「善光寺信仰と文学」という題目でお話しをさせていただきます。

まず、善光寺の「草創と展開」というふうに見出しを付けておきましたけれども、境内とその周辺から出土の古瓦がございまして、その中で古いものは9世紀後半の瓦であります。ということは、9世紀後半には、何らかの形で善光寺が堂塔を持っていたというふうに考えられます。これは、善光寺の宝物殿に一部展示がしてあったかと思うのですが、平安初期までに瓦葺きの寺が存在していたと、これらから推測されます。そのお寺は、水内郡の金刺の舎人たちの氏寺か、あるいは若麻績氏の寺というふうに考えられています。

平安末期までに天台宗の寺門派、園城寺、いわゆる三井寺の末寺化というのがなされまして、さらに江戸時代には、天台宗東叡山寛永寺の末寺という形を取って参りました。途中から浄土宗が入って、門跡寺院尼公上人という形にもなってきますけれども。

それから、鎌倉時代には、頼朝、実朝が再建に尽力をしたといいます。皆さんがよく御存知のように、御本尊は一光三尊阿弥陀如来と言います。それが、本堂の正面向かって左寄りに安置されていて、胎内くぐりをすると、ちょうど錠前があるところが、その御本尊のある場所だというふうに言われています。ご本尊を誰も鎌倉の初め以降は見えていません。見ると目が見えなくなるばかりか、命を奪われてしまうかもしれないというふうに言われてきました。因みに、弘法大師のお骨が高野山の奥の院にありますけれども、相変わらず今も弘法大師の髪と爪は伸びているという伝承があります。もう、『今昔物語集』が作られた平安末期には、そういう伝承がされています。奥の院には「維那」という役目がありまして、毎朝、お着替えと御飯を差し上げるといいます。私の存じ上げている方も、何年か「維那」という役目をしておりまして、毎日、お勤めをしておりましてけれども、りっぱな僧侶、高僧の場合は、そういうふうな伝承があります。善光寺さんは、御本尊自体が秘仏として大事にされているということです。現在、全国に新善光寺が約270ヶ寺あります。通称善光寺と称するもの、あるいは、善光寺如来を祀っている、さらには、善光寺さんに関わりを持っているというようなお寺さんが全国にたくさんあるということです。海外にも3つあるそうです。その1つは、台湾に戦前から作られた善光寺さんがあります。仏教大学名誉教授の関山和夫先生という先生が台湾へ行かれまして、あまりにも荒廃しているというので、なんとかしてはどうかという話が出ているのですが、せめて日本からツアーを組んで行って、お参りをしたらどうかと

いう話もございますが、なかなか実現をいたしません。

善光寺内の構成を見ますと、皆さん御存知のように、いわゆる事務局というのがありまして、大勧進と大本願という2つの本坊がおさめております。塔頭も、もともと衆徒と呼ばれている20の院、院とついているのは天台系、中衆と呼ばれている14坊、坊とつくると浄土宗ということになるのですが、加えて妻戸衆が5つあります。現在では、宿坊という形を取っております。

善光寺の参詣が盛んになりましたのは平安末期、いわゆる、中世に至る直前の院政期という時代がありますけれども、その頃から、だんだん参詣をすることが盛んになり、鎌倉時代には、本当に爆発的に拡大していきました。女性の信仰というのも、大変早くから行われていて、ここに、例を挙げておきましたように、後深草院の女房だった二条、『とわすがたり』の作者です。他に重盛の愛妾であった千手前とか、曾我十郎の愛妾であった虎御前といったような人々が、亡き人の菩提を弔うということを行っています。のちほど、また、ふれさせていただきます。

勧進と造営を繰り返したというのも、早くから何回も焼けているということにほかなりません。江戸時代には、町から出た火で本堂を初め、多くの建物が焼けたというので、現在の位置へ移りました。現在の位置と、それ以前の位置は、後ほどふれさせていただきます。現在の本堂は、宝永4年、江戸の中期に建立された、いわゆる撞木づくりと言われているものです。

『日本書紀』、その後、続けて六国史という形で正史、本当に正史かどうかちょっと危ないところもありますけれども、六国史が作られます。まず、『日本書紀』の中に欽明天皇の5年という年、百済の方から日本に使いが来るというか、まず、任那にやってきました、なんとか百済を助けてほしいといってきます。さらに、欽明天皇の13年5月というのがありまして、そこでも、なんとか任那を拠点として百済を助けてほしいという話があります。その欽明天皇13年、西暦552年の冬10月、百済の聖明王という王様がおりまして、552年ですけれども、お釈迦さんの金銅像1体と若干の旗とか笠といったようなもの、さらに、経典類が、若干、日本に献上されたと、送られてきたという記述が『日本書紀』の中に見えております。皆さん、よく御存知のように、善光寺仏自体が東に行きたい、東の外れの国に行きたいと言って伝わってきたと言われている。善光寺仏はインドにあること500年、その後朝鮮半島へ渡って百済で千年を経た上で、日本へ来たという記述が、すでに『日本書紀』の中に見られます。下段の方で見てまいりますと、そこでは、蘇我稲目とか、物部尾輿、中臣鎌足と言った当時の貴族たちの間で、邪教としての仏教を導入するかどうか、日本に取り込むかどうかというようなことが問題になりまして、取りあえず稲目に預けるということになるのですけれども、疫病が盛んに流行ったというので、尾輿、あるいは、その息子守屋によって善光寺仏が浪速の堀江に捨てられるというような話なのですが、のちに聖徳太子が、それをまたお祀りをしました。ところが、ずっと聖徳太子の元にいるかと思うとそうではなくて、「自分は待つ者あり」ということを言って、件の本田善光が善光寺仏を背負って帰って行くという話に繋がっていくのですけれど、『日本書紀』の中にそういう記述が取り込まれております。

平安時代に入りまして、『扶桑略記』の欽明天皇13年の記録のところにも、百済の明王（みょうおう）と書いてあるのですが、「めいおう」と読んだらいいのでしょうか、聖明王のことを言っておりますけれども、阿弥陀仏を、観音と勢至が脇にいるものを聖明王が日本に送ったという話があります。そして、そのあとに、いわゆる阿弥陀三尊がどうやって日本に来たのかという話が連綿と続いていくわけなのです。

明治の初めに出された『善光寺如来絵伝』のコンパクトなものがあります。ここには、全12図なのですけれども、こんな形で日本への伝来というのが語られております。実は、『善光寺如来略絵詞伝』というようなものがたくさん作られています。江戸の後期から明治期、大正期まで続いているのですが、上下を繋げれば「絵伝」になっていくというようなものがたくさんございます。長野を中心にして、あちこちで作られています。

それから平家物語の「覚一本」というテキストを例にあげました。これは、琵琶法師の台本で、覚

一という琵琶法師が語ったものを誰かが書き留めたというもので、非常に平家の善本として扱われているものです。巻の2、治承3年を見ると、善光寺炎焼の記事があります。実は、平家物語の十二巻本というのが一般的なのですが、十二巻と灌頂の巻というのが、それに付いています。その十二巻本の覚一本で見えていきますと、巻の1というところ、「清水（せいすい）寺炎焼」というのが、まず出てまいります。清水（きよみず）寺が燃えたという事例があります。さらに、続いて「内裏炎焼」というお話も出てまいります。巻の2を開くと、今度は、「山門滅亡」というので、天台宗の山門、延暦寺の方です。上の方ですけれども、それが滅亡という話が2段にわたって出てきます。それに続いて、「善光寺炎焼」という話が登場をしてくるというので、非常に注目しておきたい部分です。善光寺さんの炎焼の話を書きながら、実は、月蓋長者が、まず、善光寺如来、いわゆる阿弥陀三尊を招来しようとしたという話です。月蓋長者が天竺にとどまること500年、仏法東漸のことわりというのがありまして、東のほうへやっていくというので、百済に来まして百済で千年、そして、聖明王のときに、日本の欽明天皇の元へ行きたいというふうに言って日本へ移ってきた、ということです。そして、難波の堀江で見つかるという話になるのですが、ここで1つ注目しておきたいのは、「信濃の国の住人、若麻績の本田善光という者、都へ上りたりけるが云々」というふうに書かれているのですけれども、若麻績の本田善光という言い方をしているところを、ちょっと、記憶しておいていただきたいと思います。炎焼したのは、1179年が善光寺では初めてだというふうに書かれていて、仏法王法が滅びる、まず仏法が滅ぶので王法も滅んでいくということが書かれてあります。霊寺霊山の多くが、この時代、1100年代半ばを過ぎて滅んでいきました。それは、平家が終りになる前触れ、前兆であろうというふうに、『平家』の中では書かれているわけです。当時、これを通して善光寺が比叡山と並ぶような大寺院、今も巻の2の例を挙げましたけれど、山門滅亡が2つの小段に渡って書かれていると申し上げたのですけれども、その比叡山と並ぶような大寺院として、当時善光寺が認識をされていた、院政期にはすでに認識されていたというところが、極めて注目をされる部分ではないかという気がするのです。先ほどの麻績の里というふうに出てくるのですが、『和名抄』という平安時代の国語辞典と言ったらいでしょうか、それによると信濃の国の伊那郡、麻績、注の17のところに挙がっているのですが、飯田の座光寺、元善光寺の辺りという言い方をされています。ところが、次の『源平盛衰記』にも同じように「善光寺炎焼」という章段があります。『平家物語』の異本だというふうにおっしゃる方もいれば、あるいは、『平家物語』とは異なって、源平の合戦、盛衰を書いたものだという方もいらっしゃいますけれども、『源平盛衰記』のほうは48巻という、『平家物語』の4倍の分量を持っているのですが、「信濃の国、水内郡の住人、本田善光という者」というふうに書いてあります。伊那郡の麻績の本田善光としていないわけなのですから、どうも、鎌倉の初めくらいの頃には、こういう説もありまして、「水内郡」というふうになっていました。この時代に成立をした、鎌倉の初めくらいに成立をした『善光寺縁起』と称する書物の中では、「水内郡」というふうに出てきていますから、『源平盛衰記』の筆者が縁起のたぐいを承知していたのではないかという気がいたします。そこで2つを並べてみたわけなのです。

『吾妻鏡』の巻の7には、同じく文治3年、1187年7月、「頼朝と善光寺」という見出しをつけたのですが、焼けた善光寺をなんとか頼朝が再興をしようと下文を出しているのです。頼朝とその奥方である北条政子は、二人とも善光寺信仰に大変熱心でした。当時、頼朝が挙兵をするまでは伊豆の方にて、特に北伊豆地方で長く生活をしていましたけれども、その地域にすでに善光寺信仰が浸透してしまっていて、それで頼朝や政子という夫婦も、その善光寺信仰が身についていたというふうと考えられます。そして、炎焼、荒廃をしてしまった善光寺をなんとか再興をしなければいけないというので下文というのをしております。『吾妻鏡』を見ますと、ほかに「曼荼羅供」というので、曼荼羅供養をするという記事が何カ所か出てきますし、建久6年（1195年）、善光寺へ参詣したという記事もあるのです。善光寺の境内の一角で頼朝が乗ってきた馬が石を欠いたという、こ

れがその石だという場所があるのですけれども、本当かどうかわかりませんが、建久6年（1195年）8月にお参りをしたというふうに伝えられております。

『吾妻鏡』の下文のところを見ると、「勸進上人にみんなで協力をしなさい」、「莊園を持っている者、領主たちは勸進聖に協力をして、なんとか造営に尽力をするように」と命じています。「人夫、あるいは、土木作業に従事をするように」というのがありまして、7月28日、信濃の御目代殿というところに和文で善光寺造営の巻云々というふうに下文を書いているようです。そういうものがありまして、鎌倉に入ると、先ほど申し上げましたように、善光寺へ老若男女が盛んに参詣するということが行われるようになりますけれども、当時の鎌倉幕府の関係者が、善光寺の篤い信仰者であったということが、大きく影響をしているかと思います。

信生（しんぜい）法師、あるいは、「しんじょう」法師家集でしょうか、この信生法師という人物は、実は、源実朝が鶴岡八幡宮の大銀杏のところで殺されるという事件がありますけれども、その時に300名ほどの家臣たちが殉じたのです。多くの武士が切腹をしたのですけれども、信生法師、在俗の名前が塩谷朝業という名前なのですから、実朝の家来の一人だったのですが、彼は、そのとき切腹はしないで、殉じないで、家に帰ってくるわけです。なぜかという、妻が早くに亡くなって、幼い女の子とその弟がいたものですから、その二人のわが子のことが心配で、すぐに切腹をするということはできなかったのです。しばらくしてから、彼は、妻や実朝、それに殉じた人の霊を慰めるために出家をします。出家を間近にした頃、幼い7、8歳の娘が、そのことをなんとなく肌を感じたらしくて、持仏堂にお参りをして、なんとか父が私たちを捨てて家を出て行かないようにというふうに祈っています。それを耳にし、見てしまうわけなのですけれども、それでも出家の思いやみがたく、二人の子どもを置いて出家をしていきます。『信生法師家集』と一応呼ばれていますけれども、歌集であると同時に日記になっているものです。国文学の世界ではマイナーな作品となっていますけれども、実は、大学3年のとき、初めてこの『信生法師家集』を読んで非常に惹かれるものがあったのです。妻子をいかに捨てるかという、出家をするにあたっては、一番つらいことだろうと思うのです。中でも幼い子を置いていくという西行法師の伝承、中西先生の御専門の世界なのですから、西行伝承の中にも、実は、西行が出家にあたって、幼い娘を、2歳だったでしょうか、縁側から蹴落として、それを出家の契機とするという記述があります。一番自分が大事にしているようなものを出家の起源にするという話が、まことしやかに書かれています。そして鎌倉から江戸に至るまで、西行の伝承というのは、非常に注目をされています。院政期の時代から鎌倉にかけての「世の中は無常だ」というのに結びつけて、しばしば取り上げられるのですけれども、こうして信生法師は出家をいたします。出家の思いやみがたくて出家はしたのですけれども、子供たちのことも心配で、そのあと、こっそり僧侶に身をやつして、家屋敷を覗きに戻ってくるといようなこともあるのです。そして、彼は亡くなった実朝たちの菩提を慰め、供養するために善光寺へも参ります。たまたま、知り合いがいて、善光寺に籠っているというので、そこを訪ねに行くというふうな話があります。そして、二位の尼、政子の供養もするといようなことが、書かれているのです。信生法師という人物自体は、実は、栃木県の宇都宮に一族がいました。宇都宮一族の中の一人なのですから、歌人としても知られています。そして、残していったその息子が、のちに、やはり歌人になって、中世の歌人の中にその名前を見ることができるのですけれども、そういうような話が出てきます。信生が3月下旬頃から7月中旬頃まで善光寺に、元仁2年という年なのですが、4カ月くらい滞在をします。当時、出家した人は、善光寺に1カ月とか、数ヶ月滞在をして修行をするということが、結構、見られるのです。大変興味深いことなのですが、そういう意味で中世の善光寺、鎌倉以降の善光寺には、参詣してすぐ帰る人ばかりではなく、数ヶ月以上にわたって滞在して修行をする人々がかなりいたというふうに考えられます。これだけではないのですが、のちほど述べます「とわずがたり」の作者二条もしばらく善光寺にとどまってお参りをする、という記事が出てきます。

建久6年、善光寺の僧定尊という人物が、等身の善光寺仏を造ったという話は、江戸時代になってからの『本朝高僧伝』という書物の中に出てきます。たまたま、夢の中に一人の僧侶が団扇をもって出てきて、自分は善光寺如来の使いである。ぜひ、お前は善光寺にお参りをするようにというふうに夢告がなされるわけです。夢で言われたので、すぐに善光寺に行きまして、90日間、3カ月くらい善光寺の本堂に座って念仏を唱えているのですが、10月の満月の夜にまた夢を見まして、帳が開いて、そこから善光寺仏が出てきた、というのです。そして、自分の等身の像をぜひ造って、世間の人々を供養してほしいとか、導いてほしいというふうに言うわけです。そこで作った、という記事が出てきています。それが、どこにあるどの仏なのかわかりませんけれども、こういう夢のお告げというものが、ほかの例と同じように、善光寺にも伝えられています。

『大谷本願寺通紀』というのを例にあげますが、ここには親鸞聖人が善光寺詣でをしたということが書かれています。善光寺さんの仁王門すぐ右脇のところの塔頭の一つが、親鸞がやってきてしばらく逗留をした場所だと言われております。善光寺のお御堂、本堂に入りますと、そこに親鸞聖人お手植えの松というのがあります。何代目かの松がそこにあるわけなのです。そこで、善光寺にお参りをして、やがて帰るといふか、下野の高田、栃木の方へ行くのです。のちに真宗高田派になっていくのですけれども、その高田に専修寺というお寺が後に造られます。今は、本山の専修寺は、津に移っておりますが、同じように専修寺という名前のお寺が、下野の高田に今でも残っております。そして、そこには、親鸞の「絵伝」が4幅だったと思うのですけれども残っているのです。その下野の高田へ行くにあたって、善光寺仏、一光三尊仏をお分けいただくというので、その分身が信州から下野の高田へ持って行かれました。人によっては、専修寺にあるものが、もしかすると本来の善光寺仏ではないかということをおっしゃる方もいらっしゃいます。銀銅製とでも言いましょうか、白銀を銅と混ぜたものだということで、これは20年に1回、2年間かけて全国の真宗高田派のお寺さんを参るという行事がありまして、私も1度だけそれを拝顔しました。その御本尊を下野高田の檀家の方々が、寝ずの番で2人、いつも常駐をして全国を回ることが行われています。やはり、善光寺仏というものが非常に尊ばれて、大事にされてきたというのがわかります。

小見出しに「善光寺三尊仏と境内図」というふうにしたのですが、古い善光寺さんの絵が「一遍聖絵」、これは、清浄光寺という藤沢の、いわゆる遊行寺と通称されている清浄光寺にあります。全30巻という大変立派なものなのですが、外国へ今から十数年前に流れかかったのです。文化庁と清浄光寺が、海外へ流失してしまうと大変だということで共同で買ったのですが、1巻1億円という値段で、30億円というお金をかけたと言われていますが、本当かどうかわかりません。一度だけ全巻を見せていただいたことがあるのですが、今はもうだめで、デジタル化したものしか見せていただけないのですが、こういうような形でコピーをしてみました。『一遍聖絵』の絵巻の中に善光寺が出てまいりまして、ここに塙で囲まれた中に2人僧侶がいるのですが、これが、一遍と2代目になる聖戒という2人の僧侶です。この善光寺へ一遍は2度来ているのですけれども、そのあと、いろいろあちこち、長野県内でもやっていますが、佐久には一遍の伝えた踊り念仏が今日伝承されています。

下の方は、江戸時代になってからの『善光寺道名所図会』で、現在と形が似ております。左側に大本願があって仁王門があります。そして、その仁王門の右上のところに大勧進があります。それから、平成の大改修をした山門がありまして、「如来」、「御堂」というふうを書いてあるのですが、本堂がある、という形なのです。これは、現在の位置になってからのものです。

親鸞については「正像末浄土和讃」という和讃中に善光寺のことを詠っている部分があります。347番を読みますと、「善光寺の如来のわれらをあはれみましまして、なにはのうらにきたります。御名をもしらぬ守屋にて」。物部守屋が難波に沈めてしまったりしたということを踏まえて、「そのときほとをりけとまふしける」。「ほとをりけ」というのは、温かみがあるという意味です。人間のような温かみを持った善光寺仏。実際に我々はさわれませんから、温かみがあるのかどうか、

見た目にそういうふう映ったのだらうと思うのです。それから、「ほとをりけ」というのは、348番の冒頭だったのですけれど、「そのときほとをりけとまふしける。疫厲あるひはこのゆへと、守屋がたぐひはみなともに、ほとをりけとぞまふしける」。流行病が流行ったので『日本書紀』にも書かれていたのですけれど、それで難波へ、再び海へ戻ってしまったというふうなのがあるのですが、ここに5つ連続するものをあげておきました。やはり、仏様を焼こうと守屋たちが考えたのですが、焼くことができなかった。全く形を変えなかったというので、困って難波の堀江に捨ててしまったという話になっていくのです。その伝承を親鸞は知っていたようです。専修寺が持っています『善光寺如来絵伝』の中に一体分身というので善光寺仏の御分身をいただいて、下野高田へ戻っていく親鸞聖人の姿が描かれております。左側、櫃蓋で背負っていく僧侶の前のところで頭巾を被っているのが親鸞です。

次に、一遍の善光寺参詣といいまして、『一遍上人絵伝』の紹介本の中は虫食いがありまして読めないところがあるのですが、巻の1の第3段のところ、文永8年春という年に、一遍33歳なのですけれども、このときに初めて善光寺へやってまいりました。1267年だったでしょうか。ここで、「二河白道の図」を写して、伊予窪寺の本尊として念仏修行をしたというふうに言われています。

一遍は、また、41歳の時、巻の4の第5段に出てくるのですが、2度目の善光寺参詣をしています。1279年という年だったと思うのですけれども、2度目、京都の因幡薬師から48日間かけて善光寺まで参詣をしたといいます。因幡薬師というのは、京都の下京区にありますけれども、海中出現、あるいは三国伝来の仏と言い、善光寺如来、それから、嵯峨の清涼寺の釈迦如来と一緒に、この因幡堂の薬師がやってきた「日本三如来」だと言われているのですけれども、一遍は因幡の薬師から善光寺へと向かうわけです。そして善光寺から、さらに佐久へと赴きまして、そこで、初めて踊り念仏を行ったということです。今、佐久の踊り念仏というのは、国の重要無形文化財になっております。そういう意味で、佐久の踊り念仏のできたのは1279年という年なのですが、今日まで語り継がれています。何年か前に上田女子短大の講堂で、中西先生に御尽力いただいて、仏教文学会の東部例会というのを長野で行いまして、そのときに佐久の踊り念仏というのをやっていただいたのですが、本来は踊り跳ねるものです。跳ねるのですが、その踊り念仏に参加している方々が、上は80代後半くらいの方で、平均年齢70いく歳というような高齢ですから、踊るのではなくて足を引きずっているような感じなのです。昔は、跳ねた、跳ね躍りというので、「なんまいだぶ、なんまいだぶ」と言ってだんだんエクスタシーに入っていっただらうと思うのですけれども、そういうものが行われました。その佐久の踊り念仏を継承したと思われるのですが、清浄光寺（遊行寺）に行っても踊り念仏があります。僧侶の踊り念仏と一般の方が行う踊り念仏はちょっと違うようなのですが、善光寺へお参りしたあとに佐久の踊り念仏を初めて試みたというふうに伝えられています。

二条の『とわずがたり』は、承応3年（1289年）のころに書かれたのですけれども、小川口という話と、善光寺参りの話というのが出てきます。鎌倉へたまたま二条がやってきて、しばらく逗留をしており、善光寺へ行きたいと思ったのですが、年が暮れかかってしまいます。そうしたら、たまたま、ある「川越の入道と呼ばれる者」が、尼さんなののですけれども、埼玉県（武蔵の国小川口）へ下るということだったので、そこで、年が代わったならば善光寺へ参詣をしますから、あなたも行きませんかというので、大変うれしいと答えたと書かれています。前々から行きたいと思っていたので、喜んで出かけて行くわけです。ところが、人数が多いものですから、行きながらあちこち見て回るのです。とても信仰の雰囲気というものがなかったようなのです。それで善光寺へ行きまして、如月（きさらぎ）の10日あまりと言いますから、今で言えば3月に入ってからのことなのですが、善光寺へやってきました。途中、碓氷峠とか、「木曾のかけぢのまろきばし、げにふみみるからに、あやふげなるわたりなり。」なんていうふうに書いてあるのですが、道のほとりの名所なども休み休み見てきたようです。大勢であるということもあって、何となく善光寺までやっ

てきてしまったが、どうも、自分の思うような善光寺参りではないというので、「宿願の心ざしありて、しばしこもるべきよしをいひつつ、かへさにはとどまりぬ」とあります。自分一人は残りますということです。宿願の志があるので残りたいと言ったのですけれども、一緒に行った川口の入道という尼さんをはじめ、ほかの人は、女の人を一人そこに止めておくのは心配だと言うのです。しかし、大丈夫だからと言って一人残って、毎日のごとくに善光寺へお参りをするという記述です。善光寺仏というのは、生身の如来と聞いているので、非常に頼りがいがあると思って、百万遍の念仏を申して明かし暮らしていました。しばらく滞在をします。これも、さっきの僧侶とか尼僧たちが長期滞在をして修行をするというのに匹敵するのではないかという気がいたします。こういうような、信仰に基づいた作品がいくつか鎌倉時代には作られました。

そして、室町に入っていくと、文学作品ではないのですが、『看聞御記』の永享8年、1436年という年なのですが、南北朝に分れますので、北朝の崇光天皇という方の孫にあたる伏見貞成親王という方が、お書きになった日記なのですけれども、絵を「一合」と、1箱持参すると書かれています。「合」というのは、箱と同じ意味なのですけれど、1箱、絵の入った箱を持ってきて、それが「善光寺利生絵」と呼ばれているもので2巻からなるといいます。それに加えて「修験道絵」1巻が添えられていたということです。3巻、絵巻が入った箱を持っていきました。それは、聖護院が注文をして作られた絵で、実は、『看聞御記』を書いた貞成親王が詞の部分を書いているのです。そのときは書いただけで、全体の絵巻としての形を見ていないものですから、のちに、なんとかそれを絵巻の形に完成したものをぜひ見たいというので、宮中へ持ってきて天皇にも見ていただこうというので持参をしていきます。そして、天皇にお見せしました。当時の善光寺信仰が宮中の中にまで入り込んでいたという、一つの証しになるようなのが『看聞御記』中の記述です。室町期に入ると、天皇家の中でも善光寺信仰が行われていたという証拠です。

『実隆（さねたか）公記』というのがありますが、これは、「信州の沙門、戒順、勤言上」というふうに謹んで言上するというものなのですが、後柏原天皇に差し出した言上書きなのです。善光寺が炎焼、消失をしたので、前立ちの神仏を大阪の堺で注文をして造らせるのですけれども、ぜひ天皇に拝んでいただきたと願ったその文章が載っているのですが、宮中に入りまして、帰りに実隆、三条西実隆という公家なのですが、その実隆の屋敷に入っていました。その前に7年間、畿内を、京都、都の周辺を巡回したようだというのが、この記事の中からうかがわれるのです。この言上書が書かれたのが、永承5年という年ですから、1508年5月のことになっています。このように、ここでも天皇家、宮中における善光寺信仰というものを見ることができのではないかと思います。

従来、あまり取り上げられてはいないのですが、謡曲にも善光寺がたくさん出てまいります。「柏崎」という作品は、善光寺の本堂内を舞台にしています。つまり、お籠もりをしたときのことが書かれています。堂内に籠もることが一般化していく過程というのが、ここに描かれています。夫が亡くなって、それを供養するような形で善光寺へやってくるある人物がいて、それにお供をしってくる人の話なのです。そのある人の子どもが出家遁世をして善光寺へ籠もるという話で、シテが母親で、善光寺へやってきます。実際には、複式夢幻能になっていますので、後半では狂女になって出てくるのです。ワキが小太郎という子方、あるじの花若という少年にお供をしてきた人物設定になっているのですけれども、お供をして父親の菩提を弔うような形で善光寺へ来ます。母親はすでに出奔をしてしまっているという設定です。小太郎が柏崎に帰っていく際、小太郎はお父さんあるいはお母さんの形見の品を持ち帰るという話になっています。一子花若の手紙の中で、「かように候ふ者は」、「信濃の国善光寺の住僧にて候」と言っています。善光寺の僧侶というのが出てまいります。毎日、如来堂へお参りをしていて、西に向かうと善光寺が見えるとあります。そこには、生身の弥陀如来がいて、母なのですが、「わが狂乱はさておいて、死んで分れた夫をなんとか極楽浄土へお導きいただきたい」というようなことを言うのです。それに対して、御堂の内陣へは「狂

女は入ってはならない、早く出て行け」と追い出されるのですけれど、そのあとで、善光寺の如来堂が実は極楽浄土の場であるというふうに描かれています。九品の浄土、しかも、上生の台であると、そこへ、なんとか行ってほしいと言うのです。「西方極楽の上品上生の内陣にいざや参らん」と。そして、お籠もりをして「人々よ、夜念仏いざや申さん」、「夜念仏申せ人々よ。夜念仏いざや申さん」つまり、みんなでお籠もりをして念仏を唱えましょうとあります。江戸時代にも女性がお籠もりをしたのですけれども、中には、親子、母娘でやってきて、その娘が盛んに泣くのです。亡き夫のことを思い出して泣くので、母親のほうが「静かにしなさい、ここは泣いてはいけない場所だ」と諫めるのを、たまたま善光寺へお参りに来た女性が聞いて、それを書き留めた日記というようなものも伝わっています。鎌倉以降、こうやってお籠もりをしました。そして、場合によっては、亡き人を極楽浄土へ何とか導いてほしいという願いを込めるようなお話があります。やがてそこで僧侶となった息子と狂人になった母親が再会するというので、めでたしめでたしにはなっていないのですが、終りのほうに出てまいります。

それから世阿弥の作と伝えられた「山姥」という作品がありまして、これは、遊女の名前が山姥という名前なのですが、この遊女山姥が北陸経由で善光寺に参詣をいたします。善光寺如来の通ったという山野に分け入って行くのです。そうしたら、たまたま善光寺如来が信濃へやってくる道中のところで、ゆかりの場所へ行ったら、本物の山姥に出くわすという話になっています。女の人が遠くから善光寺へ参詣するという行為が、すでに室町期以前、鎌倉の終わりくらいから一般化をしていったものが、世阿弥のこの「山姥」という作品を通して見られるのです。

「土車」という作品も、先ほど、最初にあげました「柏崎」と同じような内容で、善光寺の本堂内を舞台とした話になっているのですが、妻に先立たれ、子ども一人を捨てて善光寺へとやってくる深草少将というワキの話になります。少将の子どもとその従者小次郎も善光寺へお参りにやってきます。そして、「悲しみの母は空しくなり。残る父さへ幾程なく。思の家を出で給へば」と言うのです。善光寺へ来て、子どもが嘆きの言葉を言うわけです。「信濃の国に聞えたる。善光寺にも着きにけり、着きにけり」、そして、善光寺へお参りをすることになります。「善光寺にては、尋ね逢ひ参らせうずると存じ候へども」とあります。子どもと従者は善光寺にやってきたのですが、もし、父親に会えなければしょうがない、身投げをしてみよう、死んでしまおうと決意をするものの、なかなか決意が行動には移せないのです。ようやく父子の再会がなされるという話です。善光寺にお参りすれば、極楽浄土へ生まれ変われるとか、あるいは、人に会えるということです。江戸になると、一茶の知り合いが善光寺へやってきて、善光寺の経蔵のところに落書きをしていったのですけれど、今でもその落書きは残っています。それを数日後に一茶が見つけます。もう数日早かったならば、その友人、普段滅多に会えない別の場所からやってきた友人に会えたのにという逸話が残されていますように、善光寺は、そういう人々が再会をする場所にもなっていました。

それから、御伽草子に「ものくさ太郎」のお話があります。大変、美男子ではあったのですが、ものくさであったと、そのものくさが京都へ夫役で出かけることになったら、急にものくさではなくなってしまう、という話です。実は、後に本当は尊い身分であるということがわかるという話になっています。夫役が終わったときに、たまたま、清水寺へお参りをしたところ、そこできれいな女の人に出会い、追いかけて行って求婚するという話に展開していきます。この中でも善光寺が出てきますし、「師門物語」という作品にも善光寺が出てくるのです。すなわち主人公夫妻の遍歴の物語です。全国を出家して回国修行をしていくというので、その背景には、この「師門物語」を作った出家者の存在というものがあるようです。回っていくのですけれども、それが山岳修験の道場のような場所を回っていきます。まず善光寺へ参り、それより都へ上り、紀の国の熊野山へ参り、下向に根来、小川、高野山に登り、奥の院へ参り、さらにそのあと住吉、天王寺へお参りをするとあります。嵯峨の釈迦堂だとか因幡堂の薬師、あるいは鞍馬の毘沙門、東寺、清水（せいすい）寺へもお参りをし、7日間、清水寺ではお籠もりをするという。さらに比叡山に登って、三井寺、

石山、竹生島というふうに参加するのですが、竹生島とかが出てきていますから、のちには、33番の観音霊場といったようなところや、修験とも係わるような熊野が出てきているのです。当時の修行僧たちが回った場所、出発は奥州の「はつがさき」というところから善光寺までやってくるという、阿弥陀信仰をいただくような正法をする人々がこの物語の成立に関与しています。善光寺信仰は、先程来申し上げていますように、平安末から鎌倉期にかけて大きな広がりを見せているのですが、五来重先生は、このような資料を御覧になって、善光寺聖の回国勧進活動の成果であるとおっしゃいました。五来先生は高野山、四天王寺、それから善光寺というつながりをおっしゃっていますけれども、それが、正しいかどうかは別にして、善光寺聖と目される人々が、この師門物語の背景に存在をしているということなのです。

「短冊の縁」という御伽草子の作品もあるのですが、これは一般にはあまり知られていません。下野の国の花はの庄次家定という青年とある人の姫君とが相思相愛になって契るのですが、それを常陸の国司が横恋慕しまして、そのために家定という青年のほうが、下野の国からいられなくなってしまったという話です。国司はそれを見届けて、姫君に求婚をするわけなのですが、姫君は、なんだかんだと理屈をつけて善光寺へこっそり出かけて行ってしまいます。家定も善光寺へやってきて二人は再会をする、という話です。善光寺如来の渡来の話もこの物語の先のところに書いてありまして、本田善光が登場します。山伏の修法ということが書かれているというので、善光寺聖といった人々を、やはり、背景にしているのではないかと思います。

「塩釜宮の御本地」という作品もあげておきます。花園少将という人物が陸奥の多賀の里に流されるという話ですが、この花園少将が内大臣のさわらび姫という女性と恋仲になるのですが、ここでも、陸奥の国司が横恋慕しまして、花園少将が陸奥の多賀の里というところに流されてしまいます。そこで、さわらび姫は、なんとか国司の手を逃れようというので出奔をしまして善光寺へやってきて、さらに羽黒山を経て1年後に多賀の里で別れた花園少将と再会をするという、最後はめでたし、めでたしの話です。このさわらび姫の出奔の後、どこへ行くかと聞かれたら、善光寺へ参りますというので、都から善光寺へ下っていくという話があります。次のところでも、信濃の国の善光寺へやってきて、夜もすがら御祈念するという記述があります。女が善光寺に籠るということが、この作品の中にも出てきますし、善光寺如来のお導きで二人が再会を果たすということも出てきます。

江戸に入りますと、仮名草紙の『七人比丘尼』という作品もあります。これが書かれたのは、室町の終りくらいから江戸のはじめ頃ではないかと言われています。善光寺で修行をしていた尼さんが、新潟県の妙高のあたり、関川というところで湯屋を造りまして（お風呂を造りまして）、善光寺参詣の人々を入浴させます。湯垢離を取るわけですね。湯垢離という形を取ります。それから、女の人たちが参詣をするのですが、その中の七人の話というのが出てきます。どうも、女の人が都から参詣をするときに、北陸回りをするのが多かったようだというのが、この仮名草紙の『七人比丘尼』を読んでいるとうかがわれます。

江戸に入るとたくさんの善光寺をめぐる作品がありますが、今日は、俳人2人について申し上げます。1人は芭蕉で『更級紀行』という作品を取り上げておきたいと思います。「月影や 四門四宗も只一つ」というふうに詠っています。善光寺というものの大きさというのを、詠っているのではないかと思います。

それから、一茶は先ほどちょっとお話をしましたが、一茶の句にもいくつか善光寺を詠んだことがあります。最初に出てくるのが、享和3年（1803年）という江戸の後期なのですが、「しぐるるや 牛に引かれて善光寺」と、牛に引かれて善光寺参りというのが一茶の頭の中にあっただろうと思います。「西方は善光寺道のひがん哉」という句は、文政元年（1818年）、文化文政という江戸の文化が開いたというのでしょうか、非常に華麗な時代、そういうところに出くわした一茶であったわけなのです。善光寺という詞書をつけた句もあります。「開帳に逢ふや雀も親子連」

という文政元年の句ですけれども、善光寺の御開帳が文政元年に行われたときに雀の親子について詠んだのです。雀を一茶は詠っていますが、早くに生母を失って継母が来て、まもなく弟が生まれ、その後継母や弟としょっちゅうもめることとなったのです。文政3年(1820年)6月1日から8月12日まで、実は、善光寺の江戸出開帳が行われたのですが、そのとき、一茶は逆に善光寺へ参拝をしているわけです。一茶はある時期、江戸あるいは千葉県市川のあたりに住んでいたのですけれど、文政3年の年には、彼が善光寺へやってきて、「秋風や如来の留守の善光寺」と詠みました。一光三尊仏は江戸出開帳に行ってしまいました。これをめぐって、「御留守にはこんな踊や善光寺」、「如来の留守ごとに大踊りかな」というような句を残しています。

開帳というのは、善光寺そのもので御開帳をするのを居開帳、それに対してよその地での御開帳を出開帳といいます。よその、特に三都出開帳が有名です。江戸、京、大阪という3つの大都市へ出かけて行って御開帳をすると、大勢の人々が集まるというので、だいたい60日間御開帳をすることが多いのですけれども、実は、善光寺は元禄5年という年に江戸で出開帳をしています。両国の回向院を借りて出開帳をしたのですが、この時はあまり人が集まらなかったのです。実は、かるかや山西光寺は、善光寺より早くに江戸で出開帳をやっています。最初は人がたくさん集まったのですが、元禄年間にやはり、深川の回向院だったのでしょうか、そこで出開帳をしたのですが、ちょうど梅雨時、旧暦の5月から6月に行ったので、60日間やったのですけれども、延長したにもかかわらず人が集まらない、実入りが無いというので、芝の増上寺からお金を借りて、やっとこさ信濃の国へ帰ってくるという、そういう文書というか記録が西光寺には残っております。元禄のあたりになると、江戸ではなかなか人が集まらないのですが、そんなことは言っていられないので、その後も出開帳をしました。京、大阪でも出開帳をするのですけれども、その時持っていくものは、善光寺では前立御本尊と釈迦涅槃像。世尊院の釈迦涅槃像を持っていきました。それから、御三卿の像(本田善光、弥生、善左、3人のお像)、それに御印文を持っていけます。出開帳にやってきた人たちに御印文を授けるというのも、重要なことでした。それに述べましたように、たまたま善光寺へ一茶が帰ってきてお参りした時、善光寺仏はちょうど留守だったのです。江戸へ出開帳だったという句に繋がっていくわけです。出開帳をそこにあげておきましたように、何回もやっているのですが、最初は、何年に1度というようなことはないわけです。必要に応じて出開帳をやっていますけれど、史実の上で居開帳の最初というのが、1730年、享保15年という年で、常念仏2万日、本堂落成以来のにぎわいをもたらしたというふうに言われています。弘化4年にも出開帳をやったのですが、常念仏6万5千日というのですが、実は、その御開帳が3月9日に始まって4月29日まで。ところが4月24日、いわゆる弘化4年の大地震で中止をしてしまうというようなことがありました。今だったら御開帳を続けて、被災をした人々の平穏無事を願うのではないかという気がします。

明治21年(1888年)、これ以後、御開帳は、子の年、午の年というふうに定められて、慣例となっていくのですが、明治27年という年の御開帳には、その前年、明治26年4月に信越線が全線開通をしたものですから大繁盛をしまして、どのように計算したのかわかりませんが、約30万人の人出がありました。今年の御開帳は673万人で、御開帳前に650万人を超えるだろうと言われていたのですが、そのとおりになったようです。

大正7年には、初日の人出が10万人というふうに言われています。参詣した人が、結構長い期間、50日くらいやっているのですけれども、55万人であったと言いあります。日露戦争後の景気の好況が影響して、それから明治26年に信越線が開通したということもあって、関西人が多くお参りをしました。このとき、西光寺と往生寺も同時に御開帳をしています。

1936年、昭和11年なのですけれども、新装となった長野駅、今の長野駅の前のものだろうと思うのですが、長野駅が出来上がって、開帳にあわせて落慶法要が行われたようです。お客はこのとき60万人を見込みましたけれど、ここで大事なのは、団体客、温泉行き多しという点で、現在のような形にだんだんなっていったわけです。ツアーの組み方が問題だと思うのですが、今は参詣客が67

3万人もやってきても、ほとんど長野に泊まらず、大部分の人は、上山田温泉をはじめとする周りの温泉地へ行ってしまいます。それから、善光寺自身が、善光寺のところだけではなくて長野駅の前に常駐2人くらい置いて、「どうぞ善光寺へ」と、「ここからお歩きになりますと、大変御利益があります」というふうに案内をやればいいのではないかと思うのです。よく苦言を呈するのですが、株式会社善光寺のようになってしまっていて、そういう努力をしません。

昭和17年は、大戦の前で、日中戦争が始まりましたので御開帳はとうとう中止になってしまいました。戦後間もなく平和博覧会を、昭和24年に御開帳をあわせて行ったので、このときは、入場者76万人でした。商工会議所が企画に参加をするようになったのです。

昭和36年、丑年ですけれども、産業文化博覧会が行われまして、この年150万人と、ものすごく膨らんだのでした。ここから丑年と未年に開帳をするということになり、昭和36年から現在の形になっています。

そして、平成9年このとき、参詣客515万人。元善光寺も御開帳に加わってやりました。三善光寺がやりまして、元善光寺が40万人、甲斐善光寺が80年ぶりの御開帳で約50万人が出ました。その次の御開帳のときに、祖父江善光寺も加わりまして、四善光寺御開帳という形になりました。そして、今年は、六善光寺御開帳というので、次は、もっとふえるのではないかとも思うのですが、どうなるかわかりません。

江戸時代、ちょっとおろ抜いてしまったのですが、江戸時代は、回国開帳という、いくつかの国を回るという開帳も行われていました。信仰の布教ということが、本来、御開帳の大きな目的になっていたのです。つまり、善光寺と血縁、善光寺仏と縁を結ぶということが、江戸時代は、中心であったはずなのですが、今は、だんだん違ってきてしまっているような気がします。

平成15年の御開帳は新幹線が開通したあとなのですけれども、この年は長野が市制をひいて100周年ということで、600万人以上が参詣したということです。御開帳の目的というものを勘違いしてしまうと困るという気がいたしますけれども、こんなことがあります。

全国に善光寺会の会員がいます。山梨県の甲府善光寺、今は甲斐善光寺と言っていますけれども、長野の善光寺にあわせて御開帳をして、山内寺院というのが出ていまして、長野県の一番最後に、元善光寺、飯田の座光寺が出てきます。中部に入って、岐阜県の宋休寺というのが、通称関の善光寺です。岐阜は、善光寺と称しています。さらに、愛知県の善光寺というのが、今は中島郡ではなくて、平成の大合併で稲沢市と名前を変えましたけれど、祖父江の善光寺です。次の御開帳は、いったい、どこが名乗りを上げるか楽しみです。その頃、私が、果たして七善光寺か八善光寺、全部まわれるかどうか、時間との、あるいは、体力との戦いになりそうです。

どちらかと言えば、私の最近やっていることは、絵画に見る善光寺参りというような点で、善光寺がいかに繁栄をしたのか書いてあります。江戸時代の『善光寺道名所図会』によりますと、「繁花茶店の図」という図が描かれてありますけれど、もう一度こういうふうな歩いてお参りをすることが善光寺の事務所をはじめ、長野市観光協会、あるいは、長野市の商工会議所がやったほうがいいのではないかという気がするのです。善光寺の御開帳中の約60日間は、善光寺の参道の車をバス以外一切通さないというくらいの大英断をもって、平成の御開帳というのをやってほしいと思うのですが、なかなか、そうはいかないのです。昔は、御開帳でやってくると、「お血脈頂戴の図」のように御印文をいただくということが行われていて、当時の和歌として、「血脈をいただくけふのうれしさは極楽へ行く心地こそすれ」と詠われています。

善光寺にまつわる「お血脈」という落語があります。閻魔大王の地獄が不景気なので、石川五右衛門にひとつ娑婆へ戻って、善光寺の御印文を盗んできて欲しいと言われるのです。石川五右衛門は見事に御印文を手に入れたのですが、うっかり調子に乗って、歌舞伎の大見得を切ってしまったのです。「ありがてえ」とぼんとおでこに御印文を押してしまいました。それで、五右衛門は極楽へ行ってしまった、という話です。善光寺は極楽の入り口なのです。

西国33番観音霊場の第一番が、和歌山県那智勝浦町の青岸渡寺というお寺で、最後は岐阜県の華嚴寺というところなのですが、そのあと、関東の人は必ず善光寺へお参りをして33番の札所巡りが完了したこととなるのです。

皆さま、これからも善光寺へ御参拝して是非極楽へ行っていただければと思います。私一人が代表で地獄へ参ります。おしゃべりをする人間は地獄へ落ちていくというふうに昔から言われているようです。長時間にわたって御清聴ありがとうございました。